新響

'72 新交響楽団 新春特別演奏会



主催

総合文化社

後援

TBS＝東京放送

THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA

指　揮　芥川也寸志
Conductor　YASUSHI　AKUTAGAWA
ヴァイオリン独奏　黒沼ユリ子
Violin Solo　YURIKO KURONUMA

新交響楽団 '72新春特別演奏会

I　パッサカリアとフーガ　ハ短調 ……J. S. バッハ＝ストコフスキー
Passacaglia & Fuge in C minor……J. S. Bach＝Stokowski

II　ヴァイオリン協奏曲　ホ短調……メンデルスゾーン
Violin Concerto in E minor……Mendelssohn

第1楽章　早く　かつ熱情的に
1st mov. Allegro molto appassionato
第2楽章　ゆっくりと
2nd mov. Andante
第3楽章　急がずに速く
3rd mov. Allegro ma non troppro

〈休　憩〉

III　交響曲第1番　ニ長調「巨人」……グスタフ・マーラー
Symphony No. 1 in D major "Titan"……Gustav Mahler

第1楽章　ゆるやかに、ひきずるように　—　一貫してきわめてのどかに
1st mov. Langsam. Schleppend. Wie ein Naturlaut. — Im Anfang sehr gemächlich
第2楽章　力強く、生き生きと
2nd mov. Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell
第3楽章　壮重に、威厳をもって、ひきずらぬように
3rd mov. Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen
第4楽章　嵐のように、激情をもって
4th mov. Stürmisch bewegt — Energisch

1972年2月7日(月)午後7時　日比谷公会堂



黒沼ユリ子略歴

黒沼ユリ子は東京に生まれ、10才より鷲見三郎教授にバイオリンの専門教育を受け、1956年桐朋学園音楽科に入学、第25回音楽コンクールで第1位、特賞を受賞。

1958年渡欧し1962年にプラハ音楽アカデミーを栄誉賞を受けて卒業し、1960年プラハの現代音楽コンクールで第1位を受ける。

彼女のヨーロッパデビューは1962年の国際音楽際“プラハの春”にプラハ交響楽団の独奏者として行われ、その演奏を聴いたダビッド・オイストラッフにモスクワに招かれた。

同年彼女の師の一人であるヘンリック・シェリングによりラテンアメリカへ紹介され、数々の演奏契約を受く。

彼女は間宮芳生、三善晃のバイオリン協奏曲の海外初演者としても知られ、又1970年には、チェコのイルジー・ヤロフから“協奏交響曲”を捧げられ、その世界初演をプラハで行う名誉を得た。

既に数々のレコード録音を日本及びチェコで行ない、そのレパートリーは、ドボルジャーク、ヤナーチェック、ヒンデミット、メシアン、並びに日本の現代曲、古今のバイオリン名曲などと巾広い。

1971年にウィーンにてデビューし、またシカゴ交響楽団より3月と12月の2度にわたる協演に招かれて、アメリカへのデビューを飾った。

長年の彼女による優れたチェコ音楽海外紹介の功績をチェコ政府が認めて、1970年度演奏芸術家賞が授けられ、日本に於ては、1971年度のレコードアカデミー賞が、彼女の最新レコード、ヤン・パネンカとの共演による、“チェコ・バイオリン音楽選”に与えられた。

現在日本及び世界各地で、広く活躍している日本人演奏家の一人である。

——音楽監督・常任指揮者——

芥川也寸志

Yasushi Akutagawa

1925年7月　大正文壇の巨匠竜之介の三男として東京に生れる。
1948年　東京音楽学校（現東京芸大）在学中、「交響三章章」をN響で初演。カラヤンの注目をうけ欧州楽壇に紹介される。
1953年　クルト・ウェス指揮ニューヨークフィルにより、弦楽のための三楽章「トリプティク」初演。
1954年　団伊玖磨、黛敏郎とともに「三人の会」結成。
1955年　ブルーリボン映画音楽賞受賞。
1966年　第2回日ソ青年友好祭実行委員長。
ソ連、中国、欧米、インド、朝鮮、ベトナムを歴訪。
現在　日本作曲家協議会副会長、日本現代音楽協会会員。

〈作品〉交響三章、トリプティク、交響管弦楽のための音楽、交響曲第1番、エローラ交響曲、オスティナート・シンフォニコ、チェロ協奏曲、オーケストラのためのラプソディー。

1956年新響発足以来の常任指揮者であり、1969年音楽監督就任、1968年には合唱団“鯨”を組織するなど、アマチュア界に於る貴重な指導者でもある。

新交響楽団

新交響楽団、新響は名前こそN響の前身の名前と同じですが、純然たるアマチュアのオーケストラで、サラリーマン、学生、主婦など音楽を職業としない120名の団員から成り、月々400円の団費と演奏会の収入による独立採算で運営されています。

42年秋のソ連旅行、44年秋の沖縄九州旅行という華やかな活動がある反面、実質的には何の拘束もない任意団体で、週1回2時間半の練習では、全員が常に出席という訳にも行きませんから、極端に言えば常に解体の危機に瀕しています。私達を結びつけるものは一緒にアンサンブルを創るという一点にしかありません。2～3回の練習で演奏会をもつというプロのオーケストラにはできないような、すみずみまで奏きこんだ演奏をモットーとし、毎週の練習自体をも一つの目的とする緊張と充実が団員の共通目標になっています。

新響のもう一つの目的は、オーケストラを団員の自己満足としてでなく、なるべく沢山の人々に演奏を聴いてもらいたいという、演奏団体としての活動です。

昨年から新たに若手指揮者のホープ小林研一郎氏を指揮者として正式にお願いし、芥川先生とタクトを分担して頂き、外部からの依頼に応じられる演奏団体としての体制をととのえつつあります。



最近の主な活動

1971年

1月15日　足立区成人式祝典演奏会　　足立区文化会館
交響曲第8番「未完成」＝シューベルト、交響曲第5番「運命」＝ベートーベン

4月22日　第21回定期演奏会　　虎ノ門ホール
管弦楽組曲第3番＝バッハ、バイオリン協奏曲＝ベートーベン、独奏：徳永二男、交響曲第3番＝ブラームス　同プロ**4月18日　千葉県文化会館**

7月1日　合唱団鯨演奏会に出演　　渋谷公会館
弦楽のためのレクイエム＝武満　徹、レクイエム＝フォーレ　　指揮：小林研一郎
レクイエム＝モーツァルト

8月10日　サマーコンサート　　東京文化会館
旧友＝タイケ、結婚行進曲＝メンデルスゾーン、軍隊行進曲＝シューベルト、くるみ割人形から行進曲＝チャイコフスキー、威風堂々＝エルガー（指揮：芥川）
青少年の管弦楽入門＝ブリテン（指揮：小林研一郎）
シェーラザード＝R．コルサコフ（指揮：芥川也寸志）

8月20日　3Mクラブコンサート　　郵便貯金ホール
上記ブリテンの代りに交響曲8番「未完成」＝シューベルト

10月28日　第22回定期演奏会
交響管弦楽の為の音楽＝芥川也寸志、フルート協奏曲第2番ニ長調K 314 ＝W．A．モーツァルト、独奏：澄川千津、交響曲第1番ニ長調「巨人」＝グスタフ・マーラー

12月15日(水)17日(金)　第九特別演奏会
パッサカリアとフーガハ短調＝バッハ（ストコフスキー編）、交響曲第九番「合唱付」＝ベートーベン、独唱：大川隆子(Sop.)、秋葉京子(Alt.)、金谷良三(Ten.)、田島好一(Bar.)、合唱：合唱団「鯨」
（指揮は特記以外全て芥川也寸志）

曲目解説

矢島繁良

パッサカリアとフーガ　ハ短調
バッハ＝ストコフスキー

このハ短調のパッサカリアとフーガの原曲はオーケストラのためのものではなく鍵板楽器のために書かれた。

制作年代は1705～6年頃とされている。

当時すぐれたオルガン奏者として名声の高かった彼の一面がうかがいしられるような充実した作品である。

パッサカリアはイタリアやスペインの舞曲の一種でゆっくりとした三拍子系のものに、低音部に厳格な反復のある変奏曲の一種である。

この作品は17世紀のフランスのオルガニスト、アンドレ・レイゾンのテーマが一部借用された8小節のテーマと20の変奏曲からなりたっているし、フーガの部分は対位法の妙をつくした二重フーガでできている。

当時のオーケストラ作品は今日のように音量もなく編成も小さいもので、サロンのための室内楽的傾向の強いものだが、このストコフスキーの編曲はバッハの作品のもつゴチックの大寺院にもなぞらえうる大きさを強調したものである。

バッハの音楽の偉大さは、それを表現しようとする姿勢によってその価値が変動しないということである。

ストコフスキーはオルガン奏者としてもすぐれた腕をもち、バッハの作品の改編には彼の深い音楽的教養が反映されているが、この作品についてもそれは例外ではなく、精緻で重厚なひびきの世界がみごとにオーケストラのなかに生かされているといえよう。

ヴァイオリン協奏曲　ホ短調　作品64
メンデルスゾーン

メンデルスゾーンのこの協奏曲はベートーヴェンやブラームスのそれと並んでもっともポピュラーな存在になっており、その楽章の主要な旋律は口ずさめるほど美しい魅力的なものである。

バッハの〈マタイ受難楽〉の公演は忘れられていた大バッハを認識させるための彼の功績としてしられているが、同時にオーケストラの経営に対しても積極的であり、ライプチヒのゲヴァントハウス・オーケストラの指揮者としても意欲的な仕事を残している。

そして、このオーケストラをヨーロッパー流のものにし、今日まで続くものとしての基礎を固めるにあたってメンデルスゾーンのもっともよき片腕になったのはこの協奏曲を捧げられたフェルディナンド・ダヴィドである。

ダヴィドは名教師シュポーアの門に学び、15歳の若さでゲヴァントハウス・オーケストラでデビュー、メンデルスゾーンの常任指揮者就任とともに抜てきされてコンサート・マスターとなり、また後年ライプチヒ音楽院の設立にあたり、その門からヨアヒムなどの逸材を出している名ヴァイオリニストであるが、彼の存在とその助言がこのすぐれた名作を生んだひとつの要因になったともいえよう。

曲は1838年に着想され6年の歳月を費している。

メンデルスゾーンのこの作品は天与の旋律的美しさ、羽毛のように軽妙で、とびまわる妖精のような自由さ、気品のある貴族趣味、色彩の美しさが放恣にながれずに古典的形式感でまとめられている。

曲は中断することなくつづく3つの楽章からなり、ヴァイオリンの技巧が縦横に駆使されながらも技巧だけが不自然に遊離しない節度があり、曲に気品を与えあきさせないものにしているようである。

曲はさざなみのようにゆれうごく弦の分散和音にのってソロが甘美な第1主題をうたい出す。流麗で、りんかくのはっきりしたこの主題と、優雅で瞑想的な第2主題を中心にソロとオーケストラがみごとな対話の妙をみせる典形的なソナタ形式の第1楽章にはじまる。

第2楽章は思わず息をのむような甘美なアンダンテ、3部形式からなるこの楽章はテンポの速い前後の楽章のあいだにはさまって力学的な均衡をつくりあげる。

第3楽章はソナタ形式のパッショネートなフィナーレである。ヴァイオリンのヴィルトーソ・スタイルが追究され展開されるが、発剌とした妖精パックの飛翔を思わせるフィギュアにはこれみよがしの嫌味がなく、縦横に展開されて華やかなコーダをもりあげる。

マーラー　交響曲第１番《巨人》

マーラーは生涯に九曲の交響曲を書いている。ベートーヴェンの衣鉢をつぐ交響曲の作曲家として、ブルツクナーとともに後期ロマン派の重要な存在である彼の作品は規模の大きさと特異な内容によってきわだった様式的特徴をつくりあげている。

この第１交響曲は彼の初期の大作であるが、その特異な様式感はすでに顕著にあらわれている。

ロマン派の遠心的傾向は音楽と他芸術、思想や哲学との明らかな交流のあとがみられるが、彼の芸術もその例外ではなく、ペシミスティックな汎神論的な形而上学がその音楽の支柱の一端をになっている。

ゲーテやドストエフスキー、ストリンドベルヒといったひとびとの作品にインスパイアされたと思われる人間と世界の価値への追究と超自然的なものへの共感が音楽の造形をささえ、特殊なひびきのパレットは壮麗な音のフレスコをつくりあげている。

また同じ世代のリヒアルト・シュトラウスのような意味での標題性はないにしても、形而上学的な主題性は合唱を伴う交響曲になってあらわれる。

第１交響曲は彼の青年期の音楽的告白ともいうべきもので、輝かしい青春の感じ易い心にうつる自然と世界、それをおしつぶそうとするさまざまの不幸と幻滅の対立がシンボライズされている。

この作品のタイトル〈巨人〉はジャン・パラルの同名の小説にもとづいたといわれているが、彼自身はこれに対して否定的で、概念的な表示はたんに作品に対する理解を容易にしようとする試みであったといわれている。まず“ゆっくりと、ひきずるように”という表示記号で始る第１楽章が、朝もやのたちこめるボヘミアの草原の春の雰囲気をうたいあげ、そのなかにクラリネットの三連音によって鳥の囀りがまじり、しだいに夜があけていく。つづいて〈さすらう昔人の歌〉に用いられた旋律が主題として入りこんでくる。

第２楽章は“力強く動的に”と記されたスケルツォであり、村人たちの踊りによってひきおこされる楽しくユーモラスな雰囲気にみちている。

第３楽章はアンダンテ、２楽章とのあいだに十分な休止をとってテインパニとコントラバスによってフォークロールな主題があらわれる。重いペシミスティックな雰囲気がこの楽章からはじまる。

第４楽章は“荒々しく”と記されたいわゆる《猟師の葬送行進曲》と呼ばれる部分で、テインパニと弦の奏でるはげしいパッセージのあいに行進曲風の主題があらわれる。このあらしのようなはげしい部分につづいて、力強い勝利を象徴するテーマがあらわれ、それにつづいて第１楽章にあらわれた夢みるようないくつかの主題が回想のようにまつわりつきながらしだいに華麗なコーダにうけつがれる。

形式的には後の交響曲のように型やぶりではなく、ベートーヴェン以来の定形にしたがっているが、対位法的な重苦しさ、全管楽器や打楽器の使用法などに特徴がある。



黒沼ユリ子さんのヴァイオリンについて

菅野浩和

黒沼ユリ子さんのヴァイオリンについて、一体どういう文章を書いたらいちばんふさわしいのだろうか。

たとえば、あの豊かな、ふくよかな音、そして旋律の流れ、無限に流動する表情の綾といったものを、私の拙い文章でどのように書き述べたら多少でもあの音楽に近くなるだろうか。

黒沼さんの弾くヴァイオリンには、いつでも黒沼さんの人間が見えている。しかし、私はまだ黒沼さんの人間を知っているわけではない。おつきあいする機会が全くなかったからだが、いままでに何度か聞いたその演奏から、まるでもうすでに何回も会って話を交したことのある人のような印象を受ける。私と何もしゃべったことのない人だとは、どうしても考えられないような、そんな親近感が、あのヴァイオリンの音の中に、いっぱい漂っている。

ああした暖い、ふくよかな音楽は、どういう精神と奏法から出てくるのだろうか。それでいて、いつも高度の技巧のうらづけがあるのだが、いつだってそうした技巧を表面に出して、効果で聴き手をひきずってゆくことがない。必らず一つの音楽として、しかも実に暖かい、豊かな味わいに満ちた音楽として奏するのである。最近は、世の中がどうも万事機械的になっていって、即物的な、あるいはコンピューター的な考えかたや演奏が多くなってきているように思うが、そういう時代ゆえに、黒沼さんのような、潤いのある、暖かい音楽は、本当に心にしみる。尤もこうした音楽を弾くのは黒沼さん一人ではない。外国人にも日本人にも、まだ何人かいることは確かだし、そういう人たちの存在を考えるのは心楽しいことである。

しかしそういう人たちの一人一人が、それぞれくっきりした個性を、音楽の上に見せていることは、たいへんうれしいことである。黒沼さんのヴァイオリンの音は、黒沼さんだけのもので、聴き手はその音を、その音楽を求めて黒沼さんを聞くことができ、またそういう姿勢で聞いてほしいのである。

黒沼さんをうんぬんするときに抜きにできないのは、チェコスロヴァキアの音楽のことである。これからの演奏家はぜひ自分のレパートリーに特色を見せてほしいが、黒沼さんにとってもチェコものは、わが国ではまさに独壇場である。それは単に珍らしいものを引っぱり出してやっているという意味ではなくて、最適のレパートリーとして、いちばん聴き手を唸らせる、深い演奏をもってこうした作品に当っているということである。チェコは弦の奏者の生産国といわれるくらい、弦楽の音楽にとっては主要な国で、このことは作品の点でも言えるのである。黒沼さんのすばらしい演奏によって、わが国にそのよさが伝えられるようになった作品も何曲もある（レコード録音の演奏も含めて）。もちろん日本人としての黒沼さんの、現代日本の作品への取り組みも忘れてはなるまい。多分これも、黒沼さんの最も重要な柱であると思う。

こうしてレパートリーの面と演奏の面の両側から、黒沼さんの音楽の特徴は、誰の目にも鮮やかに形成されているのだ。黒沼さんを聞くときの、ある「期待」というものは、黒沼さんに対してだけのもので、そういう「期待」は、われわれは長い間、外国の名演奏家に対しては、かなりしっかりと持ってきた。たとえばメニューインを聞く「期待」とか、スターンを聞く「期待」とか。そしていま私は、私の中に「黒沼さんを聞く期待」が、鮮明に、他のどのヴァイオリニストにまみえるときのそれとも異ったものとして形成されていることを確め得るのである。

ところで、こんな駄文が、プログラム・パンフレット上で一体何になろう。今宵はただ黒沼さんの音楽だけがあればよい日のはず、私の拙い文章が私にとっては、いまは場違いにしか思えてならない。

新春特別演奏会に寄せて

「バッハ思いつくまま」

筆者がプログラムの若干のスペースを埋めるため、とり急ぎ拙文をものにしなければならなくなったいきさつは省略させていただくとして、本日の曲目に関係ある“なるべく自由な”内容のものを書く様に依頼された事を始めに申し述べておきたい。

さて筆者は、音楽史上最大の作曲家は誰と思うか、と問われると答えるのは「ベートーヴエン」である。その次にはと聞かれると「バッハとモーツァルト」。ここまではかなり決然としているが、更にその次を問われると、かなり迷った後、普通の精神状態の時なら「ワーグナー、ドビュッシー、ストラビンスキーあたり……」とでも答えるだろう。相撲の番付に譬えるなら、横綱・大関クラスの上位3人は群を抜いているが、その次のクラスからはやや“ドングリの背くらべ”の様に思える。しかしそれでも、前頭下位の力士に相当する作曲家達でさえ、最高の敬称である“天才”の名に値する人達であろう。

筆者は久しくベートーヴエンが作曲家の最高峰であると信じて疑わなかったため、このことはほとんど一般に認められた“既成事実”のように思いこんでいたが、最近バッハ或いはモーツァルトこそ最大の作曲家だとする声も時々耳にすることに気がついた。つい数日前、芥川先生の新著「音楽の基礎」を念のため？拝読したところ、この著書から判断する限り先生はバッハを古い音楽を集大成し新しい音楽への道を開いた作曲家として最高の評価をしておられるような印象を受けた。

先生も指摘されている通り、バッハの音楽の特徴は特別に素晴しい対位法の駆使であろう。今回演奏する曲でも、低音部の反復旋律のため単調な和声と機械的な変奏をもって終り易い“パッサカリア”の部分（全曲を通じてもパッサカリアであるが）でいささかも反復を執拗と感じさせないのは目くるめく対旋律の変化だろうし“フーガ”の部分では既に対位法の関係と云える2つの旋律が一体となり、より高次の対位法である二重フーガを構成している様は、月が地球の周りを廻り両者が一体となって太陽の周りを巡っている有様を彷彿とさせる。しかし、ここで対位法は一種の手法である事を考慮せねばならないだろう。つまり、これは複雑なもの程習得に困難を要するだろうが、これをマスターした人にとっては作曲の道具にもなるだろう。しかし更に重要なことはこの手法（和声法も同様であるが）が“音楽”を定義してしまっていることである。即ち、ここで許されている書法によって書かれた場合のみが“音楽”であって、これに反した場合には音楽ではないと。

音楽が本質的に無秩序な音の集りである“雑音”と区別されるべき秩序をもった音の組合せである事を考えれば、“音楽”が種々の規制を受けて定義されるのは当然であり、又、より複雑な音楽を作り出す法則が、対位法や和声法という形で見つけ出されたことは音楽史上最も偉大な出来事に違いない。しかし一方でこの様な手法は音楽を、一つ定義の中にとじ込めてしまう危険性も合わせ持っているだろう。さきの著書で芥川先生が現代の作曲家は自分自身の和声学を持たなければならなくなっていると書かれているのは一つに、この様な意味で言われたのだと思う。

筆者の感じるところ、バッハの音楽の限界は、恐らく彼が余りに作曲の技法に長じ過ぎていたため、技法の根本である自分の定めた音楽の定義を一生の間に余り変えようとしなかったことではないかと思う。これはモーツアルトにも云えることであろう。それに引換えベートーベンの場合は9つの交響曲で象徴される如く、音楽の定義即ち音楽の領域を広げようとする努力を生涯を通じて続けていったと思う。

この様に述べると筆者はひたすらバッハに対するベートーヴェンの優位を主張するため筆を進めて来たと思われそうだが、それが筆者の意図でない。或る一面からのみ物事の比較は出来ないからである。

以前にも少し触れたが、バッハが死後メンデルスゾーンによって再認識される迄、真価が見過ごされていたのは音学史上の不思議であろう。モーツァルトは晩年ライプツィヒを訪れた時、バッハが生前使用していたオルガンを演奏して、バッハの後任の奏者から“セバスチャン・バッハの再来”と感嘆された伝えられるが、この話からバッハがその後継者はもとよりモーツァルトからも単に優れたオルガニストとしてのみ評価されていたらしい事が想像出来る。又、ベートーヴェンは常々「私の前にはモーツァルトがいた。私の後にも別のモーツァルトが出るだろう。」と語っていたというが「私の前にはバッハとモーツァルトがいた」とは語っていない。ベートヴェンの晩年の作品には好んでフーガが取り入れられている事を考え合わせてもいっそう不思議である。

ベートーヴェンの言葉を初めて裏付け？たのもメンデルスゾーンである。彼はシューマンから“モーツァルトの再来”と評されていた。モーツァルトがバッハの再来でメンデルスゾーンがモーツァルトの再来なら、さしずめメンデスルゾーンはバッハの“再々来”ということになってしまうが。

新響　菱沼佳史

新響・第23回定期演奏会

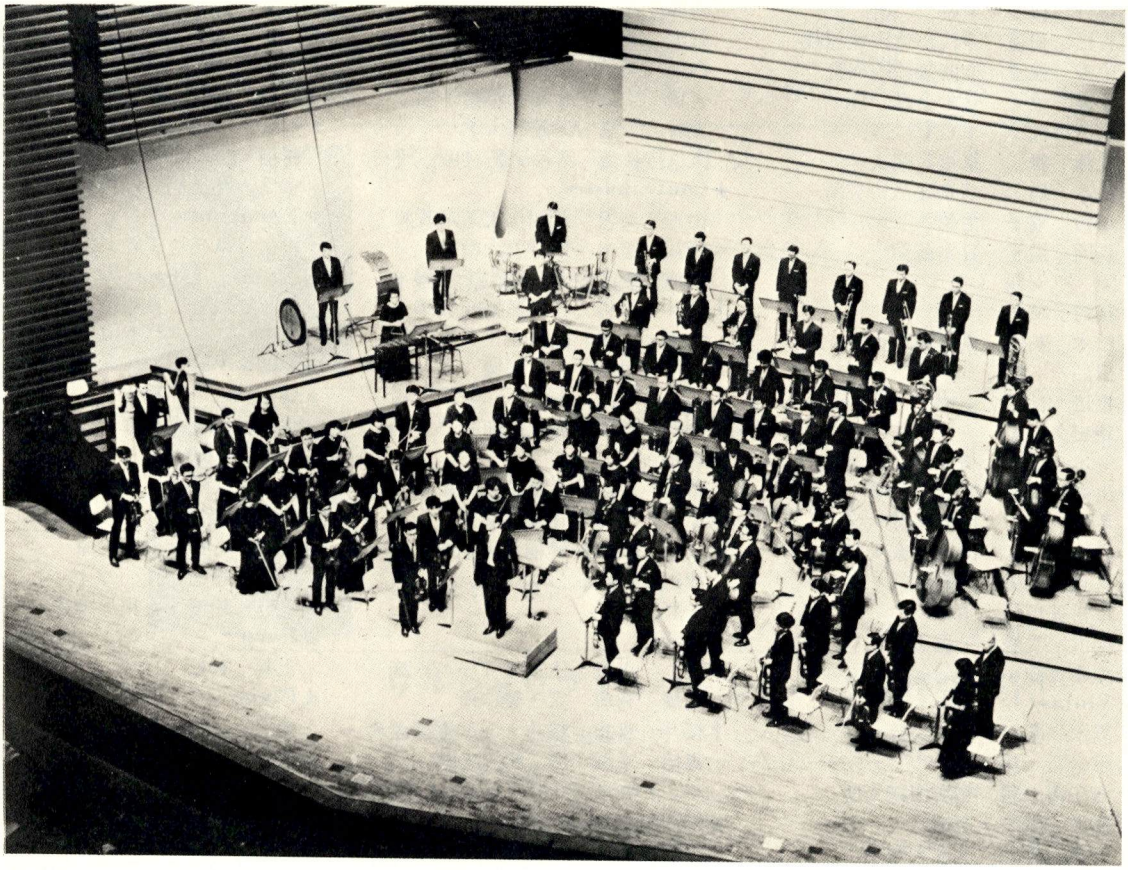
日　時　1972年4月2日(日)　午後6時半
会　場　東京文化会館大ホール
曲　目　交響曲第36番　ハ長調「リンツ」　K.425……モーツァルト
ピアノ協奏曲　第4番　作品58……ベートーベン
幻想交響曲　作品14……ベルリオーズ
演　奏　指揮：小林研一郎　ピアノ独奏：未定　管弦楽：新交響楽団
入場料　S：700円　A：500円　B：300円　(全席指定)

新響・登録会員募集中

〈新響の演奏を聴いてください〉

- 新響の演奏会の御案内を毎回お送りします。
- 入場券は一割引させて頂きます。
- 会員証を提示して頂けばプログラムは無料でさしあげます。

申込みは、〒160 新宿区須賀町14 大湊ビル 新交響楽団宛（Tel 357－5255正午～6時）ハガキにて　郵便番号、住所、氏名（フリガナ)、生年月日、ご職業、もしありましたらご所属の音楽団体、楽器をやられる方は楽器名を付記してください。



International Concert Agency

㈱総合文化社

1972 演奏会スケジュール

東京都新宿区西新宿7－7－25
岡村ビル6F TEL. 363-1561-2

5月28日(日)7:00p.m.開演
渋谷公会堂



ヴァイオリン独奏：黒沼ユリ子

ベルリオーズ：幻想交響曲OP.14

チャイコフスキー：交響曲第6番「悲愴」

誠　井　　誠：ヴァイオリンと
オーケストラの為の
協奏組曲

国立モスクワ放送交響楽団



ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー指揮

S 6,000	C 3,000
A 5,000	D 2,500
B 4,000	E 2,000

主催／総合文化社　後援／ソ連大使館　協賛／日本ビクター



ディーター・ツェヒリン

ドイツ最高文化勲章に輝くピアニスト
ドイツ・ロマンティシズムの守護神！
9月末演奏会決定（東京）



エフゲニー・マリーニン

クラシック・ピアノの王国ソヴィエトが誇る
リヒテル・ギレリスに続く第3の巨匠！
10月31日　リサイタル
11月2日　コンチェルト

ワルシャワフィルハーモニー室内管弦楽団

ポーランドが世界に誇るバロック音楽の使徒！
12月来日決定

いま、満々の自信をこめて世界に雄飛する巨匠

江藤 俊哉

●圧倒的ベスト・セラーの2大名盤と期待の裡に登場する珠玉の小品集！



江藤俊哉の協奏曲シリーズ

＊向坂正久

日本人の独奏者と外国のオーケストラによる協奏曲は今までにも単独のものとしてはあったのだが、ひとりの独奏者を中心にして企画されたシリーズは、まさに江藤俊哉をもって嚆矢とする。それは彼の経歴と実力からみて当然のことではあるが、昨年のベートーヴェンの好評に応えて、今その第二弾としてメンデルスゾーンとチャイコフスキーの協奏曲の組合せを聴く時、このシリーズの意義をさらに実感として強く感じるのである。

江藤という存在の中にはヨアヒムからアウアー、ジンバリストといったヴァイオリニスト百年の系譜と、日本の洋楽百年の歴史が決して反発せずに溶けこんでおり、そこに彼の独自性があるのだが、新録音はダウンズ指揮のニュー・フィルハーモニアという新鮮な協力者を得ていっそう生きいきとその独自性を主張している。このシリーズはおそらく歴史的な価値をもつものとなるにちがいない。

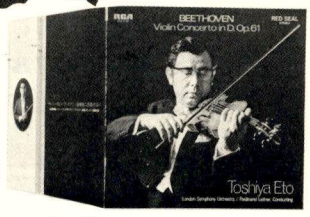


メンデルスゾーン／チャイコフスキー

ヴァイオリン協奏曲

＊江藤俊哉（ヴァイオリン）
エドワード・ダウンズ指揮
ニュー・フィルハーモニア管弦楽団

JRZ-2517　￥2,000
〈1971年7月、ロンドンEMIスタジオで収録〉



ベートーヴェン

ヴァイオリン協奏曲

＊江藤俊哉（ヴァイオリン）
フェルディナント・ライトナー指揮
ロンドン交響楽団

JRZ-2502　￥2,000

■2月25日発売

ツィゴイネルワイゼン

江藤俊哉―珠玉のヴァイオリン名曲集

ロマンス ヘ長調／ツィゴイネルワイゼン／G線上のアリア　他全11曲
＊江藤俊哉（ヴァイオリン）
ロベット指揮＝ニュー・フィルハーモニア／江藤玲子（ピアノ伴奏）

JRZ-2518　￥2,000

RCA Records and Tapes　発売元　日本ビクター株式会社